

## 巻 頭 言

本研究所の紀要『言語と文化』第28号をお届けします。

本号には研究論文6篇、研究ノートと実践報告各1篇の計8篇を掲載しています。まずは、投稿して下さった方々、そして査読を担当してくださった方々には心より厚く御礼を申し上げます。

本研究所では、本年度も研究員による学際的・国際的な共同研究および個別研究を進める一方、3年前より始めた「日中韓言語・文化に関する国際学術シンポジウム」と交流協定に基づく北京外国語大学博士課程学生を準研究員として受け入れる事業の推進に取り組みました。第3回となる今年度の「日中韓言語・文化に関する国際学術シンポジウム」は、会場を北京外国語大学に移して、10月16、17日二日間の日程で北京外国語大学、韓国日本語文化学会との共催で開催しました。参加した大学の数は昨年までの5大学から、本学を含む日本の4大学、地元中国の4大学・機関、韓国日本語文化学会に所属する14大学へと大幅に増え、本学野島正也学長の第一講演をはじめ、基調報告3件、分科会発表56件があり、韓国の仁川日報によって報じられるなど、国際的な反響がありました。本研究所で始められたシンポジウムはこのように大きな国際的な広がりを迎えられたことは誠に喜ばしいことです。協定校から準研究員を受け入れる事業が三期目を迎え、順調に推移しています。本号の掲載論文には、研究員の個人研究・共同研究の成果と並んで、協定校から受け入れた準研究員の論考も含まれています。また、本研究所の親組織である言語文化研究科は、近年北京大学日本語MTIセンター（翻訳・通訳大学院）との教育交流を積極的に進めており、本号掲載の研究ノートはその成果の一端です。附属研究所として親組織と一体となって、国際交流を推進できたことは、大いに喜びとしたいものです。

本号も多くの投稿がありましたが、厳正な審査の結果、掲載にいたらなかったものがありました。査読制度を取り入れている以上、学術雑誌としての水準を維持するためには、やむを得ないことです。これからも学術雑誌として、さらに多くの研究成果を送り出したいと、多くのご投稿を期待しつつ、巻頭の言とします。

平成28年3月

言語文化研究所  
所長 蔣 垂 東